

ミクロ経済学I演習 第11回 解答

作成日 | 2017 年 7 月 6 日

問題 1

確率論的には、当たりを選ぶためには選択を変更すべきである。便宜上三つの箱に A,B,C と名前を付け、一般性を失わず第 1 ステップで A の箱を選んだとする。この A の箱が当たりである確率は $1/3$ である。

第 2 ステップで B の箱が選ばれたとする。この事象が起こるのは、「A が正解で、B と C から B が選ばれた時」または「C が正解の時」である。それぞれの確率は、

$$\Pr[A \text{ が正解かつ } B \text{ が選ばれる}] = \frac{1}{3} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{6}$$

$$\Pr[C \text{ が正解}] = \frac{1}{3}$$

なので、B が開いたのを観察したときの A, C が当たりである確率はそれぞれ、

$$\Pr[A \text{ が正解} | B \text{ が開いた}] = \frac{1/6}{1/6 + 1/3} = \frac{1/6}{1/2} = \frac{1}{3}$$

$$\Pr[C \text{ が正解} | B \text{ が開いた}] = \frac{1/3}{1/6 + 1/3} = \frac{1/3}{1/2} = \frac{2}{3}$$

となる。したがって C が正解である確率の方が高くなる。第 2 ステップで C が開いた場合、同様に B が正解である確率の方が高くなる。

問題 2

タイプ c_H, c_L の企業 2 の均衡での生産量をそれぞれ q_H, q_L とする。

企業 1 の目的関数：

$$\begin{aligned}\pi_1(q_1) &= \theta(a - q_1 - q_H - c)q_1 + (1 - \theta)(a - q_1 - q_L - c)q_1 \\ &= (a - q_1 - c - \theta q_H - (1 - \theta)q_L)q_1\end{aligned}$$

q_1 に関する一階条件より、

$$\begin{aligned}\frac{\partial \pi_1}{\partial q_1} &= -q_1 + a - q_1 - c - \theta q_H - (1 - \theta)q_L = 0 \\ \iff q_1 &= \frac{a - c - \theta q_H - (1 - \theta)q_L}{2}\end{aligned}\tag{1}$$

を得る。

タイプ c_H の企業 2 の目的関数：

$$\pi_H(q_H) = (a - q_1 - q_H - c_H)q_H$$

◀ 厳密には生産量は非負なので得られた q_1 が 0 以上になる条件が必要である。それが満たされない場合は $q_1 = 0$ が最適反応になる。

q_H に関する一階条件より ,

$$\begin{aligned}\frac{\partial \pi_H(q_H)}{\partial q_H} &= -q_H + a - q_1 - q_H - c_H = 0 \\ \Leftrightarrow q_H &= \frac{a - q_1 - c_H}{2}\end{aligned}\quad (2)$$

を得る .

タイプ c_L の企業 2 の目的関数 :

$$\pi_L(q_L) = (a - q_1 - q_L - c_L)q_L$$

q_L に関する一階条件より ,

$$\begin{aligned}\frac{\partial \pi_L(q_L)}{\partial q_L} &= -q_L + a - q_1 - q_L - c_L = 0 \\ \Leftrightarrow q_L &= \frac{a - q_1 - c_L}{2}\end{aligned}\quad (3)$$

を得る .

(1) , (2) , (3) を連立して解くと ,

$$\begin{aligned}q_1 &= \frac{a - 2c + \theta c_H + (1 - \theta)c_L}{3} \\ q_H &= \frac{a - 2c_H + c}{3} + \frac{1 - \theta}{6}(c_H - c_L) \\ q_L &= \frac{a - 2c_L + c}{3} - \frac{\theta}{6}(c_H - c_L)\end{aligned}$$

が得られる .

問題 3

タイプ B のプレイヤーの利得を考える .

	BB	BS	SB	SS
B	$p_B \cdot 2 + (1 - p_B) \cdot 2$ $= 2$	$p_B \cdot 2 + (1 - p_B) \cdot 0$ $= 2p_B$	$p_B \cdot 0 + (1 - p_B) \cdot 2$ $= 2(1 - p_B)$	$p_B \cdot 0 + (1 - p_B) \cdot 0$ $= 0$
S	$p_B \cdot 0 + (1 - p_B) \cdot 0$ $= 0$	$p_B \cdot 0 + (1 - p_B) \cdot 1$ $= 1 - p_B$	$p_B \cdot 1 + (1 - p_B) \cdot 0$ $= p_B$	$p_B \cdot 1 + (1 - p_B) \cdot 1$ $= 1$

タイプ S のプレイヤーの利得を考える .

	BB	BS	SB	SS
B	$(1 - p_S) \cdot 1 + p_S \cdot 1$ $= 1$	$(1 - p_S) \cdot 1 + p_S \cdot 0$ $= 1 - p_S$	$(1 - p_S) \cdot 0 + p_S \cdot 1$ $= p_S$	$(1 - p_S) \cdot 0 + p_S \cdot 0$ $= 0$
S	$(1 - p_S) \cdot 0 + p_S \cdot 0$ $= 0$	$(1 - p_S) \cdot 0 + p_S \cdot 2$ $= 2p_S$	$(1 - p_S) \cdot 2 + p_S \cdot 0$ $= 2(1 - p_S)$	$(1 - p_S) \cdot 2 + p_S \cdot 2$ $= 2$

(a) $p_B < \frac{1}{3}$, $p_S < \frac{1}{3}$ のとき,

$$2p_B < 1 - p_B, 2(1 - p_B) > p_B$$

$$1 - p_S > 2p_S, 2(1 - p_S) > p_S$$

なので, 最適反応戦略をまとめると,

	BB	BS	SB	SS
BB	✓ ✓			
BS			✓	
SB		✓		✓
SS			✓	✓ ✓

となる. よってこの信念の下での純粋戦略ベイジアンナッシュ均衡は $((B,B),(B,B))$, $((S,S),(S,S))$ の二つである.

(b) $\frac{1}{3} < p_B < \frac{2}{3}$, $\frac{1}{3} < p_S < \frac{2}{3}$ のとき,

$$2p_B > 1 - p_B, 2(1 - p_B) > p_B$$

$$1 - p_S < 2p_S, 2(1 - p_S) > p_S$$

なので, 最適反応戦略をまとめると,

	BB	BS	SB	SS
BB	✓ ✓			
BS		✓ ✓	✓	
SB		✓		
SS				✓ ✓

となる. よってこの信念の下での純粋戦略ベイジアンナッシュ均衡は $((B,B),(B,B))$, $((B,S),(B,S))$, $((S,S),(S,S))$ の三つである.

(c) $p_B > \frac{2}{3}$, $p_S > \frac{2}{3}$ のとき,

$$2p_B > 1 - p_B, 2(1 - p_B) < p_B$$

$$1 - p_S < 2p_S, 2(1 - p_S) < p_S$$

なので, 最適反応戦略をまとめると,

	BB	BS	SB	SS
BB	✓ ✓			
BS		✓ ✓		
SB			✓ ✓	
SS				✓ ✓

となる. よってこの信念の下での純粋戦略ベイジアンナッシュ均衡は $((B,B),(B,B))$, $((B,S),(B,S))$, $((S,B),(S,B))$, $((S,S),(S,S))$ の四つである.

問題 4

(a) プレイヤー 1 の最適反応はタイプによらず以下の通りである .

	L	M	R
U	1	<u>1</u>	<u>1</u>
D	<u>2</u>	0	0

よってプレイヤー 1 の最適反応戦略は

$$\begin{cases} D, D & \text{for L} \\ U, U & \text{for M} \\ U, U & \text{for R} \end{cases}$$

である .

プレイヤー 2 の最適反応を求める .

	L	M	R
U, U	$\frac{1}{2} \cdot \frac{2}{3} + \frac{1}{2} \cdot \frac{2}{3} = \frac{2}{3}$	$\frac{1}{2} \cdot 0 + \frac{1}{2} \cdot 1 = \frac{1}{2}$	$\frac{1}{2} \cdot 1 + \frac{1}{2} \cdot 0 = \frac{1}{2}$
U, D	$\frac{1}{2} \cdot \frac{2}{3} + \frac{1}{2} \cdot 2 = \frac{4}{3}$	$\frac{1}{2} \cdot 0 + \frac{1}{2} \cdot 3 = \frac{3}{2}$	$\frac{1}{2} \cdot 1 + \frac{1}{2} \cdot 0 = \frac{1}{2}$
D, U	$\frac{1}{2} \cdot 2 + \frac{1}{2} \cdot \frac{2}{3} = \frac{4}{3}$	$\frac{1}{2} \cdot 0 + \frac{1}{2} \cdot 1 = \frac{1}{2}$	$\frac{1}{2} \cdot 3 + \frac{1}{2} \cdot 0 = \frac{3}{2}$
D, D	$\frac{1}{2} \cdot 2 + \frac{1}{2} \cdot 2 = 2$	$\frac{1}{2} \cdot 0 + \frac{1}{2} \cdot 3 = \frac{3}{2}$	$\frac{1}{2} \cdot 3 + \frac{1}{2} \cdot 0 = \frac{3}{2}$

各プレイヤーの最適反応を重ねると ,

	L	M	R
U, U	✓	✓	✓
U, D		✓	
D, U			✓
D, D	✓	✓	

よって $((D,D), L)$ が純粋戦略ベイジアンナッシュ均衡である .

(b) プレイヤー 1 はタイプによらず以下のように最適反応が得られる .

	LL	LM	LR	ML	MM	MR	RL	RM	RR
U	1	1	1	<u>1</u>	<u>1</u>	<u>1</u>	<u>1</u>	<u>1</u>	<u>1</u>
D	<u>2</u>	<u>2</u>	<u>2</u>	0	0	0	0	0	0

タイプ t_1 のプレイヤー 2 の最適反応を求める .

	L	M	R
U, U	$\frac{2}{3}$	0	<u>1</u>
U, D	$\frac{2}{3}$	0	<u>1</u>
D, U	2	0	<u>3</u>
D, D	2	0	<u>3</u>

タイプ t_2 のプレイヤー 2 の最適反応を求める .

	L	M	R
U, U	$\frac{2}{3}$	<u>1</u>	0
U, D	$\frac{2}{3}$	<u>1</u>	0
D, U	2	<u>3</u>	0
D, D	2	<u>3</u>	0

これら二つをまとめるとプレイヤー 2 の最適反応戦略は、プレイヤー 1 の任意の純粋戦略に対して (R, M) である。各プレイヤーの最適反応戦略を重ねると、

	LL	LM	LR	ML	MM	MR	RL	RM	RR
UU				✓	✓	✓	✓	✓	✓
UD								✓	
DU								✓	
DD	✓	✓	✓					✓	

となる。したがって純粋戦略ベイジアンナッシュ均衡は $((U,U), (R,M))$ である。

- (c) (a) のプレイヤー 2 が状態を知らない場合の均衡でのプレイヤー 2 の利得は 2 ,
 (b) のプレイヤー 2 が状態を知っている場合の均衡でのプレイヤー 2 の均衡利得は 1 である。よって情報を得ることは必ずしも均衡利得の改善にはつながらず、かえって利得を下げてしまう可能性があることがわかる。